

失敗したから 今がある 私の失敗談

社会で活躍する人々には、多かれ少なかれ失敗の経験はあるものです。

失敗とどう向き合い、なぜその後も挑戦を続けられたのでしょうか。

3名の社会人に失敗からの気づきを語っていただきました。



遊び心のナレーター
朗読YouTuber
いぬい ゆうたさん

株式会社オリイ研究所 所長
吉藤オリイさん



森永製菓コーポレートコミュニケーション部
社会貢献グループマネジャー
植竹麻衣子さん



一度の失敗で夢は絶たれた。
それでも人生の新たなスタート地点だった

遊び心のナレーター
朗読YouTuber
いぬい ゆうたさん

いぬい・ゆうた ●北海道在住。朗読YouTubeチャンネル「あめつちコトノハ堂」で活動。メディアプラットフォームnoteで短編小説やエッセイも配信。本業は北海道内の民間放送企業の会社員。テレビやラジオの現場で記者・ニュースデスク、ディレクターなどの制作現場や営業・編成などを幅広く経験。



う四半世紀以上も前のこと。私の人生の最大の失敗とも言えるのが、就活で犯したミスでした。

子どものころからラジオが好きだったのですが、大学時代に地方のラジオ局でパーソナリティを務めるアルバイトをしていました。バイトとはいえ、自分の声がラジオから流れる経験は病み付きになる魅力がありました。それが、職業としてアナウンサーを目指すきっかけとなりました。

出身地である北海道でAMラジオ放送を行っている民間放送局は2社だけでしたので、その両方のアナウンサー職に応募。当時A社はアナウンサー職と一般職の両方にエントリーが可能だったので両方に応募し、B社はどちらか一方しか





遊び心のナレーター
朗読YouTuber
いぬい ゆうたさん

受けられなかったためアナウンサー職のみエントリーしました。自信はありませんでしたが、思いのほか就活は順調に進み、両社ともアナウンサー職の1次試験を通過し、A社の一般職は早々に内定を頂くことができました。

B社は2次試験も通過し最終面接の案内の電話を頂いたとき、先方の担当者から「もし他局の内定を受けていて、そちらに就職される可能性が濃厚であれば、早めにご辞退も考えてほしい」と言われたのです。今ならもっとうまく立ち回れたかもしれませんが、学生だった自分はA社の一般職の内定を受けていたこともあり、気づくと丁重に辞退していました。アナウンサーになる夢はA社に賭けるしかなくなりました。

ところがある日、A社の人事担当者からの電話に出ると思いも寄らぬ言葉が。「今日、2次試験でしたがどうしましたか？」

信じられないことに、私は2次試験の日程を翌日だと思っていたのです。当時は就活と代表を務めていた大学のサークル活動で多忙を極めていたとはいえ、考えられない痛恨のミスです。そんな私に、A社は、内定を出している一般職での入社意思を確認してくれ、即答で入社することを伝えました。そして私のアナウンサーになる夢は絶たれたのです。

失敗できる贅沢を味わった 「文学フリマ」での本作り



「文学フリマ」で自作の小説を販売することになったいぬいさん。本作りは初めてだったため、フォーマットの間違いなどを、印刷会社の方に根気強く指摘してもらいながら、何度もやり取りを重ねた。出版や製本に詳しい知人からは「言ってくればやってあげたのに」と言われたが、人を頼って成功しても自分の経験値にならないと考え、敢えて失敗して印刷について学んでいく道を選択。「失敗できる贅沢を存分に味わいました」



遊び心のナレーター
朗読YouTuber
いぬい ゆうたさん

一度失敗しても終わりではない。次があることを部下にも伝授

就活の失敗を通して、自己管理の至らなさを痛感しました。凡ミスで夢を失ったことで落ち込み、しばらく自室にひきこもっていました。自分の性格上、自力ではどうにもできないときは、時間が過ぎるのを待つしかない、時間だけが解決できることをなんとなく自覚していたのかもしれませんが。ひたすら内省しているうちに、少しずつ気持ちが回復していきました。何より一般職としてA社に入社できる。こんなミスをした私を受け入れ、チャンスを与えてくれたA社の懐の深さがありがたかったです。

一度失敗しても終わりではないと思えたのも会社が救ってくれたおかげです。それまでは就活がゴールかと思っていましたが、就活は社会人人生のスタートでしかなかった。それは中堅以上でも同じで、ある仕事でゴールだと思ったことでも、次の仕事へのスタートだったということに気づく。その繰り返しです。部下をもつようになってからは、部下が失敗してもそれで終わりではないこと、次のチャンスがあることを必ず伝えるようにしています。自分の失敗の経験を通して、他人に対しても早急に判断せず長い目で優しく見守ろうと、人の見方も変わりました。

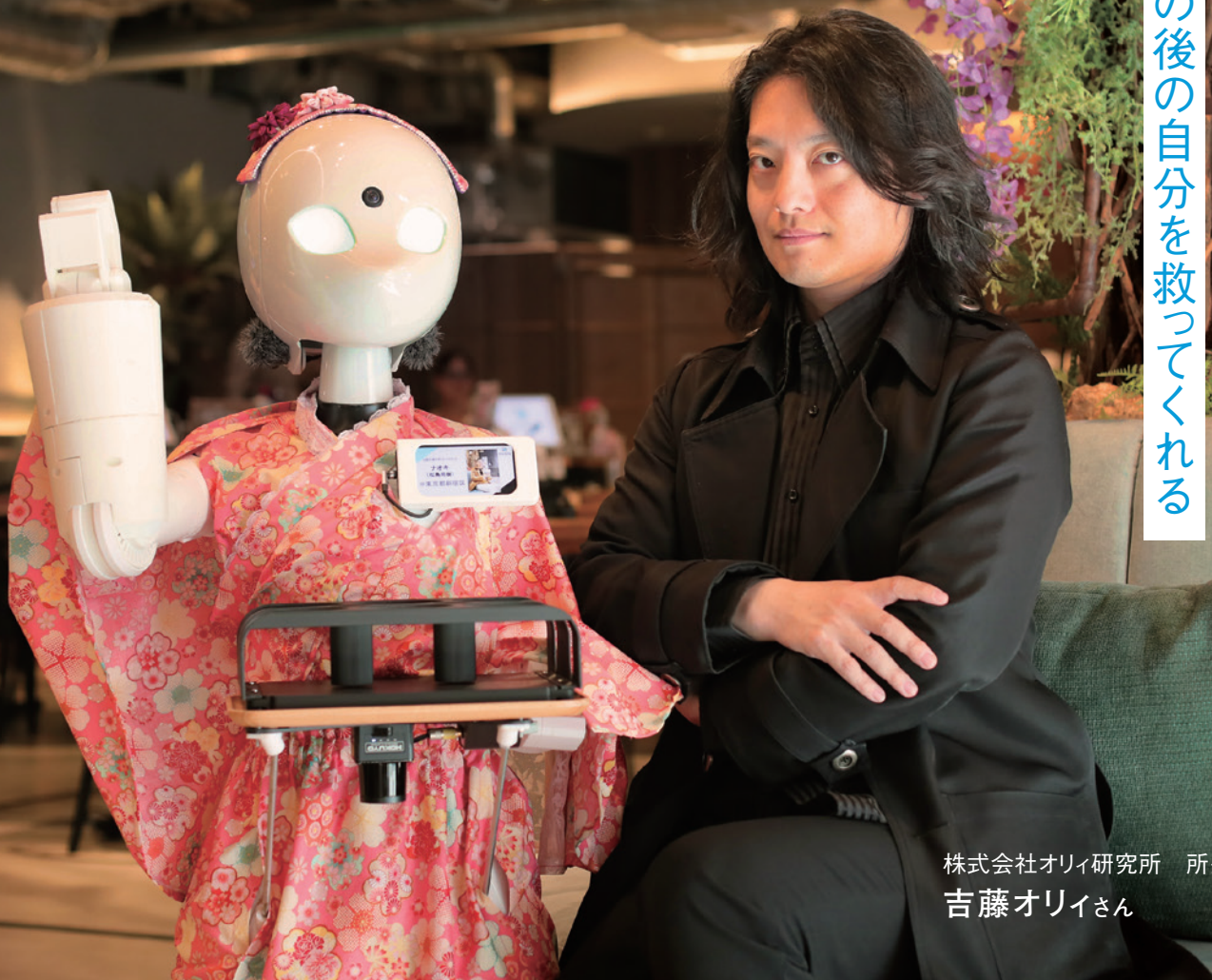
30代のディレクター職時代に、何をやってもうまくいかず落ち込んだときもあります。でも40代になって気づいたのは、当時の自分になかったのは能力ではなく経験だということ。時間が経てば経験が増え、周りの環境も変わってできるようになることも多々ある。失敗は何もかもが自分のせいではないのです。

世の中の環境が変わって、YouTubeという誰でも発信できるツールができた。そのおかげで私は今、会社員の顔とは別に朗読YouTuberとして「自分の声で作ったコンテンツをメディアで配信する」という、就活では失敗して一度は諦めた夢を叶えることができています。

失敗すると必ずそこから新たな学びを得られます。ゲームでは成功すると経験値が上がっていきませんが、人生は逆で、失敗した方が経験値が上がってレベルアップできると思うのです。だから人生を「自分育成ゲーム」だと思って、「失敗した方が成長できる。失敗は贅沢だ」というモチベーションでいろんなことにチャレンジした方が得ですね。高校生は学校というセーフティネットの枠にいられる間に、失敗する贅沢をたくさんしておけるといいですね。



失敗した経験を積み重ねることが、
その後の自分を救ってくれる



株式会社オリイ研究所 所長
吉藤オリイさん

よしふじ・おりい ●株式会社オリイ研究所代表取締役所長。高校時代に電動車椅子の新機構の発明に関わり、2004年の高校生科学技術チャレンジ（JSEC）で文部科学大臣賞、世界最大級の科学コンテストHSEFにてGrand Award 3rdを受賞。開発した分身ロボット「OriHime」が、寝たきりの障がいがある人などの分身としてカフェで活躍中。

研 究者としての私のキーワードは「1日1回失敗する」こと。失敗しないのは新しい挑戦をしていないことだと思うからです。

失敗っていいなと私が初めて感じたのは、不登校だった中学1年時に、母が申し込んだ虫型ロボット競技大会に参加したときです。不登校かつ勉強も苦手だった私は、頭の良さではほかの参加者には到底かなわないと考えました。みんな別室で一生懸命プログラムを考えていましたが、実践せずに頭の中でプログラムを考えることでは勝てないと思ったのです。だから別室には行かずに練習用コースに留まって、1行プログラムを書いたら実際に走らせてみる。失敗してひっかかったところがわかったら、また1行書き換えて走らせる、ということを繰り返した結果、なんと優勝。頭の中で完璧なプログラムを目指したほかの子たちは、誰もゴール



株式会社オリィ研究所 所長
吉藤オリィさん

できなかったのです。そのときに、失敗を繰り返したとしても手数を増やすやり方が自分に合っていると気づきました。

これは勉強も同じで、最初は解けなかった問題も反復することで記憶に残ります。何度か間違えた問題なら、いざテストに出ても慌てませんよね。予め失敗しておいた経験が後から自分を救うことが本当に多いなと思います。

失敗とは行動してみた結果なので、いろんなことをやって失敗経験を積み重ねていくと、自分の特性もわかってきます。失敗は痛みをとまいませんが、10代は自分を知る旅だと思うのです。

私自身が自我を本当の意味で意識したのは中2のとき。これもきっかけはロボットコンテストでした。すごくがんばって全国で2位に。達成感と、これだけやったのに1位になれなかったという強烈な悔しさを同時に感じました。そのときに、“自分”を強く感じて、プレイヤーとして生きている自分を、司令塔の自分が俯瞰して見ているようにメタ認知できるようになったんです。すると、少しいじめられても「これは大したことではない」と客観視できるようになりメンタルが安定してきた。不登校から脱却できたのも俯瞰的視点をもてたからです。

俯瞰的視点とともに、私の人生を安定させてくれたもう一つの要素が、17歳のときに、残りの人生は孤独の解消のために捧げると目標を決めたこと。自分で決めたことによっていろんな迷いを断ったので、生きやすくなりました。

人はみんな違いますから、誰もが自分で決断できるわけではありません。誰かに方向性を示してもらう方が、安心して一歩を踏み出せる人もいます。どんなきっかけでも行動することで成長の瞬間はありますよね。「大丈夫、失敗しても先生がいるから」と学校がセーフティネットになってあげることで、挑戦できるようになる生徒もいると思うのです。人生はよき出会いによって創られます。先生方には、それを見つける応援者になってあげてほしいと思います。



失敗を反省することは大事。
でも、挑戦に込めた想いは大切に続けていい

森永製菓
コーポレートコミュニケーション部
社会貢献グループマネジャー
植竹麻衣子さん



▲ガーナ現地視察の様子

うえたけ・まいこ ●森永製菓コーポレートコミュニケーション部社会貢献グループマネジャー、森永エンゼルミュージアム MORIUM(モリウム)館長。同社の菓子部門で関西エリア初の営業担当となった後、結婚・出産を経て2児の母となり、社内初のママ営業担当を経験。営業部と菓子マーケティング部を行き来しながら、2024年度より現職。

森

永製菓では2008年から、チョコレートなどの売上の一部をカカオ生産地域の子どもたちなどの支援として寄付する「1チョコ for 1スマイル(以下、1チョコ)」という取組を行っています。マーケティング部に所属していた2023年は取組の15周年で、特別商品の発売が決まり、私がその担当になりました。

私自身、2児の母であることもあり、子どもの社会課題に深い関心をもっていました。自分が仕事をするうえでのパーパス(志や存在意義)も「貧困をなくし、すべての子どもたちがワクワクできる社会をつくる」ということ。15周年企画には強い



森永製菓コーポレートコミュニケーション部
社会貢献グループマネジャー
植竹麻衣子さん

想いが膨らんでいきました。

そこで特別商品企画として、カカオ生産国の子どもたちにメッセージが送れる仕掛けを施し、さらに、暑い生産国の子どもたちにも送れるよう、溶けないベイクドタイプのチョコを採用しました。

ところが、この特別商品は売上目標の25%しか達成できず大失敗に。失敗の原因は、自分の想いの強さだけで突っ走ってしまったこと。想いも商品の魅力も、社内の営業担当者や小売店様、消費者の皆様には伝わらなかったのです。この失敗から、想いがひとりよがりにならないよう言語化して伝える大切さと、周囲の客観的な意見に耳を傾け、協力しながら進めることの重要性を学びました。

自分の至らなさを反省する一方で、私のパーパスや想いは大切にしたいというモヤモヤした気持ちを抱えていました。そのとき、社内のロールモデルとして尊敬し、時折相談していた他部署の先輩が「あなたは一人じゃない。社内に必ず同じ想いの人がいる。小さなつながりが、いつか大きな力になる」とかけてくれた言葉が救いになりました。

その後、1チョコ活動の一環としてガーナの現地視察メンバーに選ばれました。児童労働を目の当たりにし、カカオ生産者の想いを直接聞いたことで、1チョコ活動や自分のパーパスの意義を改めて実感。視察期間中、同行した他部署のメンバーとも日々意見交換しました。失敗からの学びを活かし一人の想いだけではなく、みんなで協力しながら何かできないかと考えていたのです。メンバーの一人が「1チョコ for 1スマイルって、実は1チョコ for ALLスマイルだよね。チョコに関わるすべての人を笑顔にしたい」と言った言葉が心に残りました。

帰国後、その言葉をヒントにできることを思案中に、食育活動として学校への出張授業などの活動を行っている社会貢献グループに異動になりました。そしてつくったプログラムが1チョコをテーマにした「未来ラーニング～チョコレートでSDGsを学ぶ～」です。現在小学4～6年生を対象に実施しています。

大失敗の経験が1チョコの活動をもっと良くしようという原動力にもなり、今実現できています。自分のパーパスが揺らがなければ、たとえ一度失敗しても他の形でやり直せると信じています。

